

淀川よどがはは五畿内第一の大河にして、六国の水こゝに帰会す。「山城、近江、河内、伊賀、丹波、摂津」河水はつねに溶々としづかにながれて、難波津なにはづへゆきかふ舟は夜とともにたえまもなく、城廓の汀には水車ありて波に随ひ■々とめぐる、領主の茶亭、橋上のゆき、美景、邃々として足らずといふことなし。「此所は鯉の名産にして美味あり、高貴の献上には城辺を用ゆ、故に常は遊獵を禁ず」

新 古 かりくらしかたの、ま柴折敷て淀の河瀬の月をみる哉 公 衡

風 雅 五月雨に岸の青柳枝ひちて梢を渡るよどの河ぶね 隆 教

玉 葉 さす棹も及ばずなれば行水に任せて下す淀の河ぶね 冬 隆

淀よどの大渡おほわたり「いにしへな木津川きづがはみ御牧まさきの西より北に流れ、宇治川うちがはに合し舟渡しあり、これをいふ。今のごとく木津川を南へ通ぜしは秀吉公ひでよしの御製作なり」大橋おほはし「木津川の末にかくる橋なり、長サ百四十間あり」小橋こはし「宇治川伏見ふしみの沢等の下流にかくるはしなり、長サ七十間、城廓造営の時かけ初しなり」